老健における音楽療法に関する研究第20報

個別音楽療法でQOLが向上した例と20年の取組み

塩谷将彦[1]美原淑子[2]美原恵里[3]
1)公益財団法人脳血管研究所介護老人保健施設アルボース介護福祉士
2)公益財団法人脳血管研究所介護老人保健施設アルボース音楽療法士
3)公益財団法人脳血管研究所介護老人保健施設アルボース施設長

[はじめに]

我々は、一昨年、昨年の全国老人保健施設大会にて、脳幹出血による四肢麻痺のクライエントに対し、個別音楽療法を実施し心理状態の改善と意思疎通が図れたことを報告した[1)2)]。今回は4年間の個別音楽療法により家族以外との意思疎通が図れQOLが向上した例を呈示し、チームで取組む音楽療法の有用性について報告する。

[症例]

50歳、男性。要介護5。X年1月(45歳時)、脳幹出血を発症し、地域の急性期病院に入院、回復期リハビリテーション病棟を経て、X年8月から当施設の利用を開始した。初回入所時は、気管カニューレが装着されており発語は不能。開眼しているがスタッフからの声掛けに眼を合わせようとせず、家族以外との意思疎通は困難であった。重度の四肢麻痺で起立不能、1日の大半をベッド上で過ごしている状態であった。

[方法]

クライエントの意思疎通方法の獲得とQOLの向上を目的とし、施設内個室にて音楽療法士とクライエント、主介護者の3名で歌唱活動と楽器演奏の個別セッションを実施した。セッションは、月2回、約1時間程度、歌唱活動はクライエントのリクエスト曲を音楽療法士がキーボードで演奏、歌唱する受動的音楽療法を実施した。能動的音楽療法としての楽器演奏は、ツリーチャイム(棒のようなものをスライドさせると音が出る楽器)を使用した。わずかに動く右手を使用して音を出せるようにするため、クライエントが持ち易いようスポンジでオリジナルの棒を作成した。

[評価]

図1参照

[結果]

図2参照

[チームでの音楽療法]

我々の取組みの特徴は、音楽療法士以外に、医師、看護師、リハスタッフ、ケアスタッフ等の多職種で音楽療法チームを構成・実施することである。全国老人保健施設大会で発表してきた内容を図3に示す。

[考察]

好きな曲や馴染みの曲を聴く、歌唱することが、クライエントの感情を呼び起こし、他者

に伝えたいという意欲を引き出し、楽器を演奏することが、やりとげるという意欲を引き出したため、セッション中の様子が改善したと想定される。一方、施設生活においては、意思疎通が可能となったことにより、心理状態やQOLは大きく向上したと思われる。さらにこのことが、クライエントの望むより細やかなケアを提供できることに結びついたと感じられる。
チームでの音楽療法は、目標設定、セッションの様子、日常生活の様子を多職種が把握することで、多面的に対応することが可能であり、質の高いケアを提供するために有用と思われる。
[まとめ]
脳幹出血発症後、家族以外との意思疎通が困難なクライエントに対し、4年間の個別セッションとして歌唱活動と楽器演奏を行った。その結果、意欲が向上し、意思疎通が可能となり、利用者のQOLを高めることにつながった。脳血管障害慢性期で四肢麻痺があっても、音楽療法により状態の改善が期待できることを示した症例である。
チームによる音楽療法は質の高いケアを提供するために有用と思われる。
[引用・参考文献]
1)塩谷将彦他：老健における音楽療法に関する研究第18報. 第26回全国老人保健施設大会横浜2015
2)塩谷将彦他：老健における音楽療法に関する研究第19報. 第27回全国老人保健施設大会大阪2016
3)美原淑子他：日本バイオミュージック学会誌18.2000
4)日本脳卒中学会Stroke Scale 作成委員会編：脳卒中25.2003
図1
図2
図3

家族以外との意思疎通が困難であった症例に対し個別音楽療法を実施した。その結果、スタッフとの意思疎通が可能となり利用者のQOLは向上した。チームによる音楽療法は質の高いケアを提供するために有用である。
カテゴリ1群101入所
カテゴリ2群206データのある「効果」の提示
カテゴリ 3 群 E3318 その他コミュニケーション